

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

編集後記

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

80

(終了ページ / End Page)

80

(発行年 / Year)

1959-11-16

編集後記

秋の深まるにつれて安保条約改定をめぐる論議・運動も活潑になってきた。学内でも、これについての研究集会学生大会が連日のように開かれている。

日本政府が安保改定を発想したのは、一年以前にさかのぼるが、そのさいの政府首脳の見通しは大変甘かったようだ。かれらは、改定をもって、内には過去八年の条約下の体験から発した国民の不満、批判の声をそらせ、外には独立国らしい体面をつくらせようとした。しかしアメリカ側との交渉過程でこの意図は全く画餅に帰し、伝えられる改定案はアメリカのペースに全然はまりこんだものとならざるをえなかった。現行条約は、朝鮮戦争後の、原爆保有量においてアメリカがソヴェトに対して優位を保っていた時代に結ばれたものだ。しかし現在、ソヴェトにおけるミサイルの段ちがいの発展(あいつぐ人工衛星・宇宙ステーションの優先はそれを如実に示している)によって、この力関係は逆轉させられてしまっている。つまり、最近の情勢の発展は、アメリカ側にとっても、条約の改定を必至としていたのである。おそらく日本政府

の首脳にはそこまでを見通す眼の持ち合わせはなかったのだろう。

だがいまわれわれは、日本政府の島国根性を嘲笑するだけですましてはおられない。改定の結果は、一層の軍備拡張・国民生活の圧迫国際緊張の増大をもたらし、日本民族を国際的孤立の道へと追いやるであろう。文学とは思えば、こうした緊急の事態にさいしてひどく迂遠な武器のようである。だが迂遠な途といえどもその出発点は、つねに現在にある。汚辱と偽瞞に満ちた現代の虚構を粉碎してゆくことなしに、ゆたかなヴィジョンをつくり出すことはできないはずだ。(阪下記)

本号から、新しい企画として「近代日本文学史敘述の研究」を掲載してゆくこととなった。そのまえがきにもあるように、すでに年余の共同研究がかさねられてきており、今後号を追って成果が出されてゆくはずである。未開の領域に鉄をうちこむものとして、ご期待を乞う。

なお、次号には木藤才蔵講師による宗祇の未刊連歌学書「浅茅」の翻刻、論文として、正木信一、阪下圭八、橋本稔諸氏が執筆されるはずである。

一九五九年一月一〇日発行

定価 八〇円

日本文学誌要 第四号

編集委員

法政大学国文学会

近藤 忠義 小田切秀雄

小原 元 正木 信一

阪下 圭八 杉本圭三郎

橋本 稔 内田 保男

佐藤 輝夫 山崎 仁平

印刷者

東京都中央区銀座東三ノ七

東銀座印刷出版株式会社

電話東銀座(54)三九四七

発行所

東京都千代田区富士見町

法政大学大学院内

法政大学国文学會

電話東京(30)二三五一番

振替東京六九四三番